

平成 27 年 5 月 15 日

技術 WG

技術 WG 活動計画（案）

1. 機関リポジトリログの標準処理・解析結果表示システムの構築

(1) 検討体制

- ・平成 26 年 11 月より、慶應義塾大学の五十嵐 WG メンバーをチームリーダーとし、サブグループを立ちあげ活動中

(2) 平成 26 年度中の活動状況

- ・標準ロボットリストの共有
 - ・機関リポジトリアクセス統計の横断比較を可能にするには、統計から機械的なアクセス（ロボット）を排除するための、標準ロボットリストが不可欠
 - ・電子ジャーナルを対象とする標準ロボットリストとしては COUNTER が公開しているものがあるが、機関リポジトリの統計に用いるには不十分
 - ・これまで JAIRO で管理してきたロボットリスト（ロボット User Agent と IP アドレスのブラックリスト）を COUNTER のリストとマージしたリストを作成することに
 - ・平成 26 年度で仕様検討終了、発注中
- ・アクセス統計の横断比較フレームワーク構築
 - ・標準ロボットリストの公開はアクセス統計横断比較の最低限の必要条件に過ぎない
 - ・アクセス統計の横断比較を簡易に行えるフレームワークを構築する必要がある
 - ・クラウドコンピューティングプラットフォーム Microsoft Azure を用い、横断比較フレームの構築を開始中
 - ・JAIRO ロボットリスト（COUNTER とマージしたものではない）、JAIRO Cloud のアクセスログ、IRDB のメタデータを用いて、現状分析のプロセスを構築中

(3) 平成 27 年度の活動予定

- ・アクセス統計横断比較の第一段階として、以下の統計データを出力可能にする
 - ・アクセス数の機関間比較
 - ・機関リポジトリ全体のアイテム別ランキング
 - ・アイテム詳細画面とファイルダウンロード別のアクセス数
 - ・アクセス元 IP アドレス別アクセス件数
- ・Open Repositories 2015 でここまでの成果について発表（6 月）

- ・ JAIRO Cloud 以外のソフトウェアで構築されたリポジトリへの対応検討
- ・ リポジトリログデータの受け渡し方法の検討
 - ・ 例：IRUS-UK では手動ではなく、リポジトリソフトウェア側から自動でログを送信する仕組みが採用されている
- ・ より高度な分析・データマイニングの可能性検討

2. 機関リポジトリと researchmap の連携

(1) 検討体制

- ・ 山地、青山、林、前田、佐藤

(2) 平成 26 年度中の活動状況

- ・ researchmap と機関リポジトリ（IRDB）メタデータのマッチング、researchmap と他の学術論文データベース（ScienceDirect）とのマッチングを検討中
- ・ 筑波大学を対象に、researchmap、IRDB、ScienceDirect のそれぞれのデータの性質と、マッチング手法を検討中

(3) 平成 27 年度の活動予定

- ・ 筑波大学のデータを対象としたマッチング手法の検討を継続
 - ・ CrossRef、Sherpa/ROMEO のデータも活用

3. 機関リポジトリにおける雑誌論文の登録業務に関する調査（旧称：ニーズ調査）実施

(1) 検討体制

- ・ 個別のグループは設けず、佐藤を中心に WG 全体で検討

(2) 平成 26 年度中の活動状況

- ・ 質問紙原案の作成・Web Survey システムの手配まで済んでいる
- ・ 依頼文書の作成等が残っている

(3) 平成 27 年度の活動予定

- ・実施について再検討したい
- ・内閣府や JSPS の政策を受けて、平成 27 年度は IR のワークフローに手を入れるチャンスになりうるのでは？
- ・現在のワークフローにマッチしたシステム構築を提案するのと、英 RCUK のように「こんなワークフローでやるのがよい」という（押し付けがましくも感じられるが）ワークフローそのものを提案する方向に持っていくのと、どちらが良いか？
- ・推進委員会の場で是非を問いたい

4. 平成 27 年度からの活動トピックについて（提案）

平成 26 年度中は取り組んでいなかったが、下記の活動について平成 27 年度より取り組みを検討している。ただし、委員会全体として取り組む／他 WG で取り組む可能性も過去の議論等で述べられていた項目もあり、本日の委員会でこれらの扱いについても検討いただきたい。

(1) SCPJ の今後の運用指針の検討

平成 26 年度中には旧称：ニーズ調査の一部として、SCPJ の利用状況や要望に関する調査も技術 WG で行う予定であった。

前述のとおり内閣府・JSPS の政策を受け、IR への登録呼びかけのワークフローが変化するとして、国内学会のポリシー確認時に SCPJ が従来以上に活用されるようになる可能性は高いと考えられる。

SCPJ の運用指針の検討や内容の更新については過去にも委員会で議論されているが、はっきりとした結論は出ないままになっていた。内容的に技術 WG が扱うことかどうかは検討の余地が大きいですが、当トピックの今年度の委員会内での扱い自体も含めて検討いただきたい。

(2) OA 方針対象論文のトラッキングへの対応

JSPS から科研費の成果を受けた論文の OA 化状況が問われることとなり、また京都大学では OA 方針が明示される等、OA 義務化の動きは今後、国内でも進むと考えられる。これら義務化対象論文の実際の OA 化状況、OA 化へのリポジトリの貢献状況をトラッキングすることは方針の成果とリポジトリの重要性を示す上で重要となると考えられる。一方で、これを技術的なサポートなしで実施しようとした場合、多大な作業量を伴うことは想像に難くない。

ワークフローの提案とも関係するが、このトピックについても委員会内での扱いを検討

したい（技術単独でやる、と言わないのは、メタデータやリポジトリワークフロー自体とも関係しうるため）。

(3) DOI 登録のサポート

平成 26 年度に取り組んだ JaLC ガイドラインのフォロー。実際に各大学で DOI 登録をスムーズに行えるのかどうか、状況のトラッキングや、躓きやすいポイントへのサポート等も必要ならば行う必要がある。これも技術 WG 単独というより、コンテンツ（研修等）と協力しながら実施することが効果的か、あるいは完全に他 WG や NII 本体で行うか等、検討いただきたい。